

下総台地における加曽利 E III・IV 式土器の 編年学的研究の現状と課題

加納 実

はじめに

東京帝国大学人類学教室による加曽利貝塚 B・D・E 地点の発掘調査から 100 年が経ち、この間、加曽利 E 式土器の編年学的研究の深化に伴い、細別成果を基にした集落研究に進捗がうかがえる。下総台地においては、この細別を基にした大内による真摯な分析（大内 2006）を嚆矢として、筆者の分析などが続いてきたところである（加納 2020・2023）。

一方、広く関東を鳥瞰すると、石井寛による港北ニュータウン地域での分析成果（石井 1999・2001・2004・2010・2012・2014 など）が中期集落研究を牽引してきた。これら港北ニュータウン地域における集落研究成果と下総台地における成果の対照作業の前提として、港北ニュータウン地域における編年観と、下総台地で一般的に用いられている編年観との対照が求められている。

下総台地における加曽利 E 式土器後半期の編年学的研究について、筆者はその一翼を担ってきたところ（加納 1989a・1989b・1994・1995 など）ではあるが、編年案の公表から約 35 年が経ち、下総台地の新資料の飛躍的増加により、修正を余儀なくされている部分もある。また前述の、港北ニュータウン地域における編年観と、下総台地で一般的に用いられている編年観の対照が求められている状況に鑑み、今回、本稿をこの修正と対照の場、及び現状の把握の場とさせていただくに至った。

なお、筆者の加曽利 E 式土器の細別及び表記は、所謂ローマ数字編年— I 式・II 式・III 式・IV 式—（岡本勇 1963・1965）に準拠している。

1 加曽利 E III 式土器古段階

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

加曽利 E III 式土器古段階の枠組について、港北ニュータウン地域では、「II 式と III 式の境は吉井城山遺跡において B 類とされた、「対向 U 字交錯文」（稲村 1990）の成立をもってあたることとなる」とされている。併せて「この段階には従前の「口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢」が強い流れをもって存続していることは、ここで断る必要はなかろう」とし、「この段階を「E III 式古段階」とする」と捉えられている（石井 2014）。なお、稲村の謂う「対向 U 字交錯文」（稲村 1990）は、筆者の謂う「横位連携弧線文」に概ね相当する。

(2) 加曽利 E II 式土器／加曽利 E III 式土器におけるキャリパー形土器

横位連携弧線文土器に伴うキャリパー形土器群を汎関東的に瞥見し、これらを加曽利 E II 式土器のものと区別する特徴として、筆者はかつて、

- 1) 口縁部文様帯と胴部文様帯を区別する明瞭なヨコ一次区画効果（稲田 1972）が減少する
- 2) 懸垂文効果を有する無文部が拡大し、本来“地”の部分であった縄文部に懸垂文効果が移りつつある
- 3) 懸垂文を描出する沈線が、縄文部の上端で連結し、懸垂文効果が完全に縄文部によって描出される

4) 懸垂文を描出する沈線が口縁部文様に癒着（付着）し一体化の傾向が窺える

という 4 点を指摘し、「キャリパー形土器のみの分析によって E II 式と E III 式土器の境界を明瞭に線引きすることは現段階では困難」であり、「E III 式土器の成立はやはり現段階では、従来の認識どおり横位連携弧線文土器の出現をもってメルクマールとするのが妥当であろう」と捉えた（加納 1989b）。

この把握については現状においても大きな変更はないが、例えば住居跡から単体でキャリパー形土器が出土した場合、この住居の設営・廃棄時期が加曾利 E II 式期新段階であるのか、もしくは加曾利 E III 式期古段階であるのか、そのような判断を迫られる状況では、土器論上の厳密な姿勢と、集落分析における時期決定の要請との狭間で我々は苦悩を強いられることとなる。具体的な例としては柏市林台遺跡（柏市教育委員会 1989）52 号住の図 2-3・4 のような土器群が単体で出土した場合、現状では明確な対応方針はなく、同一遺跡での一括資料のあり方や、遺跡出土土器群総体の様相から、個別の判断とせざるをえない状況にある。

(3) 加曾利 E II 式土器／加曾利 E III 式土器と大木 8b 式土器／大木 9a 式土器

大木 8b 式土器においては、器面に縄文を施した後に、隆帯そのもので渦巻意匠を施している。このことは、盛岡市繫遺跡例（図 1）の隆帯剥落部分に地文の縄文が明瞭に残っていることからうかがえよう。一方、大木 9a 式土器においては、隆帯で囲ったパネル状の渦巻状意匠を施した後に、この意匠内に縄文を充填するようになる。

すなわち、器面に施される意匠が、「描線そのもの」（大木 8b 式土器）によるものから、「隆帯で囲まれたパネル状の意匠」（大木 9a 式土器）に移行することになる。つまり、描線で囲ったパネル状の意匠内に縄文を施し、このパネル状の意匠を器面全体に隙間なく充填していくようになる。描線で囲まれたパネル内の縄文は、隆帯の施文後に施されることから、描線に制約されて、意匠内に充填されることになる。



図 1 盛岡市繫遺跡出土大木 8b 式土器（盛岡市教育委員会提供）

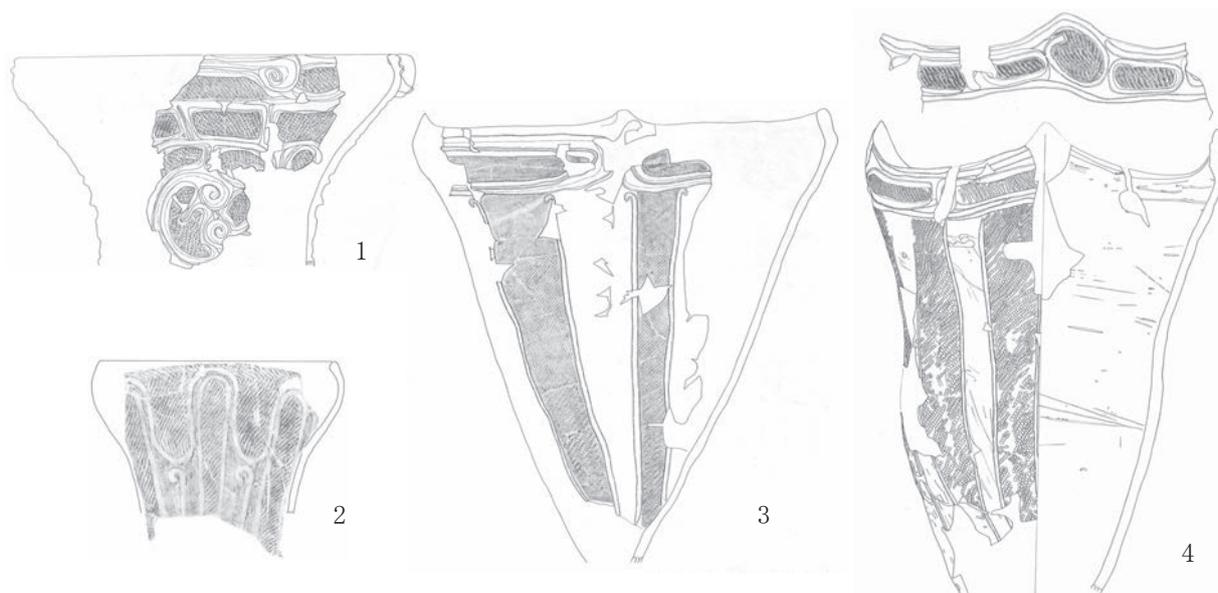


図2 柏市林台遺跡 52号住出土土器群 (S=1/10)

この意匠描出方法の移行が加曽利 E 式土器に大きな影響を及ぼすことになるが、この詳細は（加納 2008 P220-221）を併読願いたい。

さて、筆者はかねがね加曽利 E Ⅲ式土器の成立と大木 9 a 式土器の成立は、概ね軌を一にしているとの認識を示してきた（加納 1989a・1989b・1994・1995・2023 など）。これについては、大枠として軌を一にするとの認識は変わらないものの、詳細に観察すると再検討の余地がある。

柏市林台遺跡（柏市教育委員会 1989）において、図 2-1 は大木 9 a 式土器であり、これに 2 のような横位連携弧線文土器が伴うことから、これらは全体として加曽利 E Ⅲ式土器古段階と捉えることができよう。一方、流山市小谷貝塚（流山市教育委員会 2017）において、図 3-1 は大木 9 a 式土器であり、これに 2 のような連弧文土器（横位連携弧線文土器以前の土器群）が伴うことから、これらは全体として加曽利 E Ⅱ式土器新段階と捉えざるを得ない。

このように、大木 9 a 式土器は、加曽利 E Ⅱ式土器新段階から加曽利 E Ⅲ式土器古段階に跨るものと把握しておかなければならないであろう。

2 加曽利 E Ⅲ式土器新段階と加曽利 E Ⅳ式土器

(1) 港北ニュータウン地域における枠組

加曽利 E Ⅲ式土器新段階の枠組について、港北ニュータウン地域での把握は、「Ⅲ式新段階」では口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢はほぼ姿を消し、残存した場合も形骸的な様相となる。「対向 U 字文類型」にあつては器形の大形化が進み、深く明瞭であった沈線は、広く浅いものへと変化する」とされ、併せて「逆に細めの鋭い沈線による描出をなす一群が参画するが、この段階では中形から小形の深鉢に多く用いられる傾向がある」と

図3 流山市小谷貝塚
SK 34 出土土器群 (S=1/10)

なる（石井 2014）。

この把握に関し、横浜市都筑区加賀原遺跡報告書で示された学史的経緯を踏まえた石井の解説を示すと、長文の引用となるが、「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査団においては、加曽利 E 式土器の細分呼称は、基本的に『日本の考古学』（岡本 1965）、そしてそれを発展させた、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の細分基準（谷井ほか 1982）に依ってきた。今回の報告で 8 号や 9 号住居址の埋甕に用いられている土器群については、「III 式新段階」として扱ってきたが、必ずしも調査団として徹底したものではなかった。III 式の基準としてきた「吉井城山遺跡」の報告（岡本 1963）に依る限りでは、この段階は皿式とも IV 式としても扱うことが可能という事情もあった。一方、近年の動向を鑑みるに、この段階については IV 式に組み入れる扱いが一般的となっている。細部に関する問題に触れる余裕はないが、この報告にあたって、従来「III 式新段階」としてきた段階を「IV 式古段階」と改称することも考慮した。しかし、一部のみの改編・改称は混乱を生ずる原因となる。港北ニュータウン地域の調査活動においても、加曽利 E 式全体の細分呼称の見直しに関して、久しく再検討すべき段階にあるが、とりあえず今回は従前通りの対処をなしておくこととした」となる（石井 2012）。なお、本件に関わる筆者の認識については、別稿で示したことがあるので（加納 2023 p17 註 1）、併読願いたい。

さて、図 4-3 は報告書中で、加曽利 E III 式期と捉えた住居跡（15 住）出土で、加曽利 E III 式古段階との比較において、「時間的には 8 号や 9 号住居址がそれに続き、15 号住居址もそこに含まれる可能性がある」と加曽利 E III 式期新段階と時期設定されたものである。

ともあれ、ここでは、図 4 に示した横浜市都筑区加賀原遺跡出土土器群について、現段階では、港北ニュータウン地域における加曽利 E III 式土器新段階の土器群であると示しておきたい。

さて、加曽利 E IV 式土器の枠組について、港北ニュータウン地域では、「IV 式」は「III 式新段階」からの連続性が強く、分別に苦慮する事例も多い。口縁部を巡る沈線や隆線に、文様の上端が接続する事例が増加する」とされている。さらに、この「文様の上端が接続する事例」について、「この特徴は称名寺式初頭段階では更に徹底して、口縁部沈線や隆帯の個所で文様上端が途切れる事例が通例化する。細く鋭い沈線による施文は大形の深鉢にも採用が進み、中には沈線の施文に続いて縄文を充填した後、無文部を研磨し、その際、沈線を潰してしまうような事例も見られるようになる」とされている（石井 2014）。



図 4 横浜市都筑区加賀原遺跡出土土器群 (S=1/10)

(2) 下総台地における編年学上の齟齬と解消

筆者はこれまで、下総台地における加曽利 E III 式土器新段階の標準的な資料として、千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群 (図 5 (財) 千葉県文化財センター 1976) を示してきた。

1 については、無文部の拡大や渦巻文意匠の球状意匠への簡略化を窺い得るものとして加曽利 E III 式土器新段階と捉えた。また 2 については、弧線文の単位文化がうかがえる土器群として加曽利 E III 式土器新段階として捉えた (加納 1989a・1989b・1994)。すなわち、「加曽利 E III 式土器 (古段階) の文様構成法に着目し、無文部の拡大・横位連携効果の低下が認められるものを、概ね加曽利 E III 式土器 (新段階) として捉え、弧線文の単位文化を以て加曽利 IV 式土器」 (加納 1994) として捉えてきた。

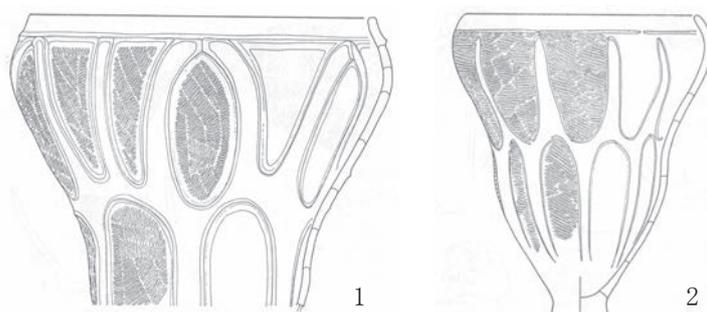


図 5 千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群 (S=1/10)

一方筆者は、港北ニュータウン地域での石井の一連の集落分析を学ぶ過程のなかで、千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群については、港北ニュータウン地域にあつては加曽利 E IV 式期と把握されているとの認識に至り、冒頭に記した通り、港北ニュータウン地域における編年観と、下総台地で一般的に用いられている編年観の対照が求められている状況に鑑み、千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群については、加曽利 E IV 式期と捉え直したい。

さて、ここで問題となるのは、従来、下総台地において加曽利 E III 式期新段階として捉えてきた千葉市中野僧御堂遺跡第 8 号住出土土器群を加曽利 E IV 式期として捉えなおした場合、あらためて下総台地において加曽利 E III 式期新段階の標準的な個体を示す必要である。これについて暫定的ながら、図 6-1・2 に示した酒々井町飯積原山遺跡例 ((公財) 千葉県教育振興財団 2014・2015) 土器群を充てておきたい。

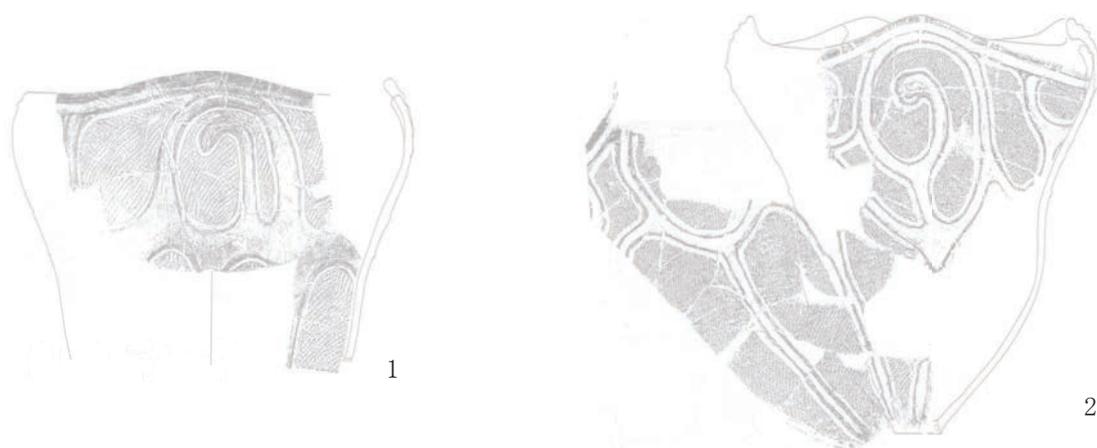


図 6 酒々井町飯積原山遺跡出土土器群 (S=1/10) 1 : 飯積原山遺跡 2 (9) S1148 2 : 飯積原山遺跡 4 (78) SK497

これらの土器群は、無文部が拡大し、渦巻状意匠の形骸化が認められ、単位文化が進行していると捉え得る土器群である。加曽利 E III 式土器古段階→加曽利 E III 式土器新段階→加曽利 E IV 式土器の大局的な変遷観である、先述の「加曽利 E III 式土器（古段階）の文様構成法に着目し、無文部の拡大・横位連携効果の低下が認められるものを、概ね加曽利 E III 式土器（新段階）として捉えるものである。

「弧線文の単位文化を以て加曽利 IV 式土器」（加納 1994）と捉えるながれを遵守し、中野僧御堂遺跡 8 号住出土土器群の評価を修正しつつ、昨今の良好な新資料（飯積原山遺跡出土土器群）を加曽利 E III 式土器新段階として示しておくものである。

3 下総台地における編年と所謂“新地平編年”との対照

港北ニュータウン地域における編年観と下総台地において一般的に用いられている編年観の対照が求められている状況に鑑み、論を進めてきた。

一方、所謂“新地平グループ”各研究者による一連の多摩・武蔵野地域における編年観の提示と集落分析（黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995、黒尾和久 2015a、小林謙一 1999・2019 ほか）は、今後も当該地域における編年学的研究及び集落研究を牽引していくであろう。この状況に鑑み、新地平グループの各研究者による一連の多摩・武蔵野地域における編年観と、下総台地における編年観の対照を示しておきたい。

例えば、黒尾和久によるあきる野市前原遺跡・大上遺跡出土土器群による編年（黒尾 2010）、立川市向郷遺跡・国立市緑川東遺跡出土土器群による編年（黒尾 2015b）、東京都羽村市山根坂上・羽ケ田上遺跡出土土器群による編年（黒尾 2021）と、下総台地における編年を対照すると、一部の土器についての位置づけに齟齬は認められるものの、概ね、

新地平編年	下総台地編年
12 c 期	加曽利 E III 式期（古段階）
13 a 期	加曽利 E III 式期（新段階）
13 b 期	加曽利 E IV 式期

と捉えることができよう。

このあたりの対応関係については、大内が示した編年対応関係（大内 2008）によくまとめられていることから、これを示しておきたい（図 7）。

おわりに

冒頭に記した通り、下総台地における加曽利 E 式土器後半期の編年学的研究について、筆者の編年案の公表から約 35 年が経ち、下総台地の新資料の飛躍的増加により修正を余儀なくされている部分があり、まさに、下総台地における加曽利 E III・IV 式土器の編年学的研究の現状と課題を示してきた。

また、港北ニュータウン地域における編年観や所謂新地平編年と、下総台地において一般的に用いられている編年観との対照を行ったのは、加曽利貝塚 B・D・E 地点の発掘調査から 100 年を迎え、縄文土器の編年学的研究の成果を礎にした縄文集落・社会の研究の進展を視座に置いたからである。

埼玉編年 (谷井ほか 1982)		加納編年 (加納 1989・1994)	新地平編年 (黒尾和久に よる：小林ほか 2004)	
(型式)	(細別 時期)		(細別 時期)	(型式)
加曾利 E I	IX a		9 c	
	IX b		10 a	加曾利 E 1
	X		10 b	
加曾利 E II	XI		10 c	加曾利 E 2
	XII a		11 a	
			11 b	
	XII b		11 c 1	
加曾利 E III	XIII	加曾利 E III (古段階)	11 c 2	加曾利 E 3
加曾利 E IV	XIV	加曾利 E III (新段階)	12 a	
		加曾利 E IV	12 b	
			12 c	
			13 a	加曾利 E 4
			13 b	

図7 編年対応関係 (大内 2008)

参考・引用文献

- 石井 寛 1999 『小丸遺跡』(財) 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 2001 『前高山遺跡』(財) 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 2004 『高山遺跡』(財) 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 2010 「縄文時代の遺跡群と地域集団-港北ニュータウン地域の遺跡群研究から-」『横浜市歴史博物館 紀要』VOL. 14
- 石井 寛 2012 「第3編 まとめと考察」『加賀原遺跡・佐江戸8遺跡』(公財) 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 2014 「縄文中期から後期への推移に関する一考察-港北 N. T. 遺跡群を対象に-」『横浜市歴史博物館 紀要』VOL. 18
- 稲田孝司 1972 「縄文土器文様発達史・素描 (上)」『考古学研究』72 考古学研究会
- 稲村晃嗣 1990 「加曾利 E 系列の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 大内千年 2006 「第6章第1節 縄文時代」『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書 II-市原市中潤ヶ広遺跡 (上層)-』(財) 千葉県教育振興財団
- 大内千年 2008 「千葉県における小規模集落の分析-中期後葉土器編年に関する補足・市原市中潤ヶ広遺跡の事例を手がかりに-」『縄文研究の新地平 (続) ~ 堅穴住居・集落調査のリサーチデザイン ~』六一書房
- 岡本 勇 1963 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器 (二)」『横須賀市博物館研究報告 (人文科学) 7』
- 岡本 勇 1965 「3 関東」『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房新社

下総台地における加曽利EⅢ・Ⅳ式土器の編年学的研究の現状と課題

加納 実

柏市教育委員会 1989『柏市埋蔵文化財調査報告書14 - 林台遺跡-』

加納 実 1989a「千葉県における加曽利E式土器後半の様相」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所

加納 実 1989b「2. 縄文時代」『小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』(財)千葉県文化財センター

加納 実 1994「加曽利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析—配列・編年の前提作業として—」『貝塚博物館紀要』第21号
千葉県立加曽利貝塚博物館

加納 実 1995「下総台地における加曽利EⅢ式期の諸問題—集落の成立に関する予察を中心に—」『研究紀要』16
(財)千葉県文化財センター

加納 実 2008「搬入土器・異系統土器」『土器を読み取る—縄文土器の情報—』縄文時代の考古学7 同成社

加納 実 2020「山武郡芝山町古宿・上谷遺跡の再検討—小規模集落の分析にむけて—」『研究連絡誌』第82号
(公財)千葉県教育振興財団

加納 実 2023「千葉市緑区鎌取遺跡の再検討—小規模集落の分析にむけて②—」『研究連絡誌』第89号
(公財)千葉県教育振興財団

黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム
縄文中期集落研究の新地平〔発表要旨・資料〕』縄文中期集落研究グループ 宇津木台地区考古学研究会

黒尾和久ほか 2010「時間軸の設定—秋留台地域における土器の編年—」『東京都あきる野市 前原・大上・北伊奈』
あきる野市前原遺跡調査会

黒尾和久 2015a「第4節 縄文時代中期の集落像」『新八王子市史』通史編1 原始・古代 八王子市

黒尾和久ほか 2015b『緑川東遺跡第28地点』国立市教育委員会

黒尾和久 2016「基調報告3：加曽利E式」『シンポジウム 縄文研究の地平 2016 —新地平編年の再構築— 発表要旨』
縄文研究の地平グループ セツルメント研究会

黒尾和久 2021「羽村市における縄文中期の土器編年」『羽村市史 資料編 考古・中世補遺』羽村市

(公財)千葉県教育振興財団 2014『酒々井町飯積原山遺跡 2 縄文時代編』

(公財)千葉県教育振興財団 2015『酒々井町飯積原山遺跡 4』

小林謙一 1999「縄文時代中期集落における一時的集落景観の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集

小林謙一 2004『縄文社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房

小林謙一 2009「14C年代測定を利用した縄文中期堅穴住居の実態の把握」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集

小林謙一 2019「縄文土器編年研究の方向性—南西関東地方縄文中期を題材に—」『考古学の地平Ⅱ—縄文時代中期の
土器論と生業研究の新視点—』山本典幸・考古学の地平グループ編 六一書房

(財)千葉県文化財センター 1976『千葉市中野僧御堂遺跡』

鈴木徳雄 2013「称名寺式前後の土器の存在形態と変化」『「完新世の気候変動と縄文文化の変化」公開

シンポジウム予稿集』公開シンポジウム「関東信越地方における中期／後期変動期」実行委員会

谷井 彪ほか 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要 1982』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

流山市教育委員会 2017『平成26・27年度 流山市市内遺跡群発掘調査報告書 I 小谷貝塚I地点 II 小谷貝塚J地点
III 野々下金クソ遺跡』